

# 地域の食育イベント参加者の食育に対する考え および家庭における食育の実態

Views on Dietary Education among Participants in Community Dietary Education Events  
and the Status of Dietary Education Provided at Home

中 岡 加奈絵\* \*\* 野 田 聖 子\* 山 田 麻 子\* 五 関-曾根 正江\*  
Kanae NAKAOKA Seiko NODA Asako YAMADA Masae GOSEKI-SONE

**要 約** 食育イベントに来場した子どもの保護者を対象に質問紙調査を実施した。食育への関心度については、下の子よりも上の子の年齢が影響していること、また、上の子の年齢が低いほど食育への関心度が高くなることが示された。家庭での食育の内容としては、食事場面における関わりについての回答が多くみられたが、「食育」で得たい知識や力としては、「食べ物や栄養、健康に関する知識」と回答した者の割合が高かった。食育イベントで扱ってほしいテーマとしては、家庭で教えている内容だけでなく、家庭で教えていることとしては上位にあがらない内容について選択した者の割合が高かった。本研究結果は、家庭と学校・保育所等や地域と連携した食育推進ならびに食育イベントの質向上のために活用されることが期待される。

**キーワード**：食育イベント、地域、家庭、子ども、保護者

**Abstract** The current study surveyed the parents of children who participated in dietary education events. Results indicated that the age of older children had more impact on the level of their interest in dietary education than that of the younger children, and the younger the age of the older children, the greater their interest in dietary education. When asked about the content of dietary education provided at home, many of the parents answered about how they interact with their children during mealtimes. Asked about “dietary education,” a large percentage of the parents responded that they wish to acquire knowledge about food, nutrition, and health. The topics they wished for dietary education events to cover included what they teach at home as well as topics that are rarely taught at home. The results of this study should be used to promote dietary education through the collaboration of families, schools/nursery schools, and communities and to improve the quality of dietary education events.

**Key words** : Dietary education event, Community, Home, Child, Parent

## 1. 緒言

私たち人間が生きていくためには、「食」は欠かせることができない。健康寿命の延伸が国民的課題と

なっているわが国においては、「人生 100 年時代」に向けて、妊産婦や乳幼児から高齢者に至るまで、切れ目のない食育の推進が求められる。食育基本法に基づき、食育の推進に関する基本的な方針や目標について定められている第 4 次食育推進基本計画（令和 3～7 年度）<sup>1)</sup>においては、重点事項のひとつとして「生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進」が掲げられており、これに基づき、家庭、学校・保育所等、地域の各段階において食育が推進さ

\* 日本女子大学 家政学部 食物学科  
Department of Food and Nutrition, Faculty of Human  
Sciences and Design, Japan Women's University

\*\* 十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科  
Department of Food and Nutrition, Faculty of Human Life,  
Jumonji University

れている。心身の健康増進のためには食生活の改善が必要になるが、そのためにはまず、幅広い年齢層に対して広くアプローチし、無関心層も含めて食育に関心を持ってもらうことや、より一層、食育への関心を高めることが望まれる。その目的を達成するための地域における活動として、多くの自治体で食育イベントが実施されており、我々は管理栄養士養成校の立場で、特に食習慣の基礎形成に重要な時期にある「子ども」とその保護者を対象とし、情報提供等を行っている。成人を対象とした食育の推進に関するアンケート調査結果<sup>2)</sup>によると、行政機関のイベントやPRをきっかけとして、「メタボの予防や改善のための食事・運動・体重計測のどれかを実践することは重要だと思うようになった」者は12.0%、「郷土料理や伝統料理などを次世代に伝えることは重要だと思うようになった」者は11.7%、「『食品ロス』削減に取り組むことは重要だと思うようになった」者は11.1%、「郷土料理や伝統料理などを次世代に伝えることは重要だと思うようになった」者は10.3%、「栄養バランスに配慮した食生活を送ることは重要だと思うようになった」者は9.7%、「朝食や夕食を家族と一緒に食べることは重要だと思うようになった」者は7.7%、「朝食を食べることは重要だと思うようになった」者は6.7%、「食事のマナーや作法は重要だと思うようになった」者は4.5%であったことが報告されており、食育イベントによる一定の効果が示されているが、子どもの保護者に限定した食育イベントに関する調査報告は見当たらない。先行研究においては、家庭や学校・保育所等における食育の実施状況等については数多く報告されているが<sup>3), 4), 5)</sup>、地域での食育イベントに関する報告<sup>6), 7)</sup>はかなり限定的である。食育への関心を高め、食行動の変容、さらには食生活の改善につながるきっかけとして食育イベントを開催するためには、来場者の食育に関する実態を把握した上でニーズにあったプログラムを提供する必要があると考えられる。特に小児期における健全な食習慣の確立は、心身の発達に重要であるばかりでなく、成人後の健康にも大きく影響するため、食育イベントにおいて子どもたちやその保護者に対して効果的な働きかけができれば、将来を見据えた健康づくりに役立つ家庭での日常的な食育推進につながる事が期待される。

そこで本研究は、食育イベント来場者として子ど

もの保護者に着目し、食育に対する考えや家庭での食育の実施状況の実態把握を行うことで、家庭と学校・保育所等や地域と連携した食育推進ならびに食育イベントの質向上のための基礎資料を得ることを目的として実施した。

## 2. 方法

### (1) 対象

2017年10月中旬および2018年11月中旬に東京都渋谷区のY公園で行われた東京都主催の食育イベントにおいて、日本女子大学栄養学研究室の出席ブースへ立ち寄った子どもの保護者のうち、調査への参加を希望した者を対象とした(2017年度76人、2018年度76人)。本研究では、調査対象者すべてを解析対象とした(有効回答率100%)。

### (2) 質問紙調査

自記式質問紙を用いて実施した。調査項目は、食育への関心度、家庭での食育の内容、食育イベントで扱ってほしいテーマ、食育イベントで魅力を感じるプログラム、「食育」で得たい知識や力、保育・教育施設へ期待する食育のテーマについてである。食育への関心度については、食育に関する意識調査<sup>8)</sup>に基づき「あなたは食育に関心がありますか」と尋ね、「関心がある」、「どちらかと言えば関心がある」、「どちらかと言えば関心がない」、「関心がない」の4段階で回答を求めた。「関心がある」あるいは「どちらかと言えば関心がある」と回答した者には、その理由として、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」、「食生活の乱れが問題になっているから」、「肥満ややせすぎが問題になっているから」、「生活習慣病の増加が問題になっているから」、「食品の安全確保が重要だから」、「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが重要だから」、「食料を海外からの輸入に依存しすぎることが問題だから」、「消費者と生産者の間の交流や信頼が足りないと思うから」、「有機農業など自然環境と調和した食料生産が重要だから」、「大量の食べ残しなど食品廃棄物が問題だから」、「自然の恩恵や食に対する感謝の念が薄れているから」の中からあてはまるものを3つまで選択してもらった。家庭での食育の内容については、児童生徒の食生活実態調査<sup>9)</sup>を参考に、「ご家庭では食に関することでお子さんにどのようなことを教えていますか」と尋ね、「食べる前の手洗い」、

「食べるときのあいさつ」, 「食器の並べ方」, 「食具(箸・スプーン等)の使い方」, 「食べる時の姿勢」, 「好き嫌いをなく食べること」, 「残さず食べること」, 「よく噛んで食べること」, 「簡単な食事作り」, 「郷土食・伝統食について」, 「食材や食事を作ってくれる人に感謝の心を持つこと(以降、『感謝の心を持つこと』と表記)」, 「食品の旬や栄養素について」, 「食事のマナー」, 「食と健康について」, 「食品の選び方」の中からあてはまるものを全て選択してもらった。食育イベントで扱ってほしいテーマと保育・教育施設へ期待する食育のテーマについても、同じ選択肢を提示し、あてはまるものを全て選択してもらった。なお、保育・教育施設へ期待する食育のテーマについては、2018年度のみ設問として含めた。食育イベントで魅力を感じるプログラムについては、「『食育イベント』ではどのようなプログラムに魅力を感じますか」という設問に対し、「クイズラリー・スタンプラリー」, 「ゲーム」, 「絵本や紙芝居の読み聞かせ」, 「ダンス」, 「劇」, 「簡単な実験や調理」, 「食べ物の試食・食べ比べ」, 「ステージショー」の中からあてはまるものを全て選択してもらった。「食育」で得たい知識や力については、先行研究<sup>10)</sup>を参考に設問を設定した。『食育』で得たい知識や力について、あてはまるもの全てに○をつけてください」という問いに対し、「食べ物に関する知識」, 「栄養に関する知識」, 「健康に関する知識」, 「伝統・行事食に関する知識」, 「栽培に関する知識」, 「正しい食事マナー」, 「調理技術」, 「自分の食生活を管理する力」, 「家族の食生活を管理する力」の中からあてはまるものを全て選択してもらった。

対象属性としては、回答者(保護者)の年齢・性別・子どもとの続柄、子どもの年齢および性別に関する項目を設け、自由記述形式で回答を求めた。また、食育イベントへの来場回数、参加したきっかけ、参加した目的についても尋ねた。

### (3) 解析方法

統計解析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics 26(日本アイ・ビー・エム株式会社)を用い、有意水準は5%とした。質的データについては、カイ二乗検定にて検討し、3項目以上の比較において有意な差が認められた場合は残差分析を行った。なお、クロス集計表で期待度数が5未満のセルが全てのセルに対して20%以上ある場合には、Fisherの正確確率

検定を用いた。

### (4) 倫理的配慮

本研究は、日本女子大学の倫理審査委員会において審査を受け、承認を得て実施した(倫理審査委員会承認番号:第369号)。まず、調査員が調査の趣旨ならびに質問紙の内容について資料を用いながら口頭にて説明し、調査への参加希望者に対してのみ質問紙を配付した。ブース内にて質問紙に記入してもらい、記入済みの質問紙は調査員が回収した。なお、個人情報保護の観点から調査は匿名で実施し、ID番号にて管理した。

## 3. 結果

回答者(保護者)の年齢構成は、未回答者を除き、20歳代が8人(5.6%)、30歳代が68人(47.2%)、40歳代が58人(40.3%)、50歳代が2人(1.4%)、60歳以上が8人(5.6%)であった。男性は29人(19.5%)、女性は120人(80.5%)であり、子どもとの続柄として、「母親」と回答したのが108人(76.6%)、「父親」と回答したのが27人(19.1%)、「祖母」と回答したのが4人(2.8%)、「祖父」と回答したのが1人(0.7%)であった。「叔父」という回答も1件得られた。

子どもの年齢は、0歳が3人、1歳が9人、2歳が17人、3歳が36人、4歳が14人、5歳が40人、6歳が27人、7歳が13人、8歳が20人、9歳が4人、10歳が9人、11歳が3人、12歳が2人であり、性別の内訳は、男児が115人、女児が75人、未回答が7人であった。

本調査を行った食育イベントへの来場回数が「はじめて」と回答した者は112人(74.2%)、「2回目」は29人(19.1%)、「3回目」は4人(2.6%)、「4回以上」は6人(4.0%)であった。参加したきっかけが「通りすがり」だった者は71人(53.4%)、「近所」は19人(14.3%)、「紹介」は9人(6.8%)、「ちらしやホームページ」は32人(24.1%)であった。参加した目的が「情報収集」の者は14人(11.1%)、「お土産をもらう」は3人(2.4%)、「楽しむ」は103人(81.7%)、「時間つぶし」は4人(3.2%)であった。

### (1) 食育への関心度

食育に「関心がある」者は71人(47.7%)、「ど

「どちらかと言えば関心がある」者は72人(48.3%)、「どちらかと言えば関心がない」者は5人(3.4%)、「関心がない」者は1人(0.7%)であった。子どもの年齢別の結果については、Fig. 1に示した。子どもの年齢別の結果について、食育に「関心がある」者と「どちらかと言えば関心がある」者に着目して解析を行った結果、「関心がある/どちらかと言えば関心がある」と回答した者の割合は、上の子が1~2歳の場合は100.0%/0.0%、3~5歳の場合は50.8%/49.2%、6歳以上の場合は42.4%/57.6%であった( $p < 0.05$ , カイ二乗検定)。残差分析の結果、上の子が1~2歳の場合、食育に「関心がある」と回答した者の割合が有意に高いことが示された( $p < 0.05$ )。下の子が1~2歳の場合は53.8%/46.2%、3~5歳の場合には46.6%/53.4%、6歳以上の場合は47.6%/52.4%であり、有意な差は認められなかった。なお、一人っ子の場合、上の子と下の子それぞれに含めて結果を示した。図表には示していないが、子どもの人数では食育の関心度に有

意な差は認められなかった。男児がいない場合に食育に「関心がある」と回答した者は28人(58.3%)であり、男児がいる場合の28人(43.1%)と比べて、高値傾向を示した( $p = 0.079$ )。なお、保護者の性別や年齢では、食育への関心度に有意な差は認められなかった。

食育に「関心がある」あるいは「どちらかと言えば関心がある」と回答した者に対して理由を尋ねた結果、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」という回答が112人(85.5%)と最も多く、「食生活の乱れが問題になっているから」が34人(26.0%)、「生活習慣病の増加が問題になっているから」が27人(20.6%)、「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが重要だから」が25人(19.1%)、「大量の食べ残しなど食品廃棄物が問題だから」が24人(18.3%)、「肥満ややせすぎが問題になっているから」が21人(16.0%)、「食品の安全確保が重要だから」が16人(12.3%)、「自然の恩恵や食に対する感謝の念が薄れているから」が

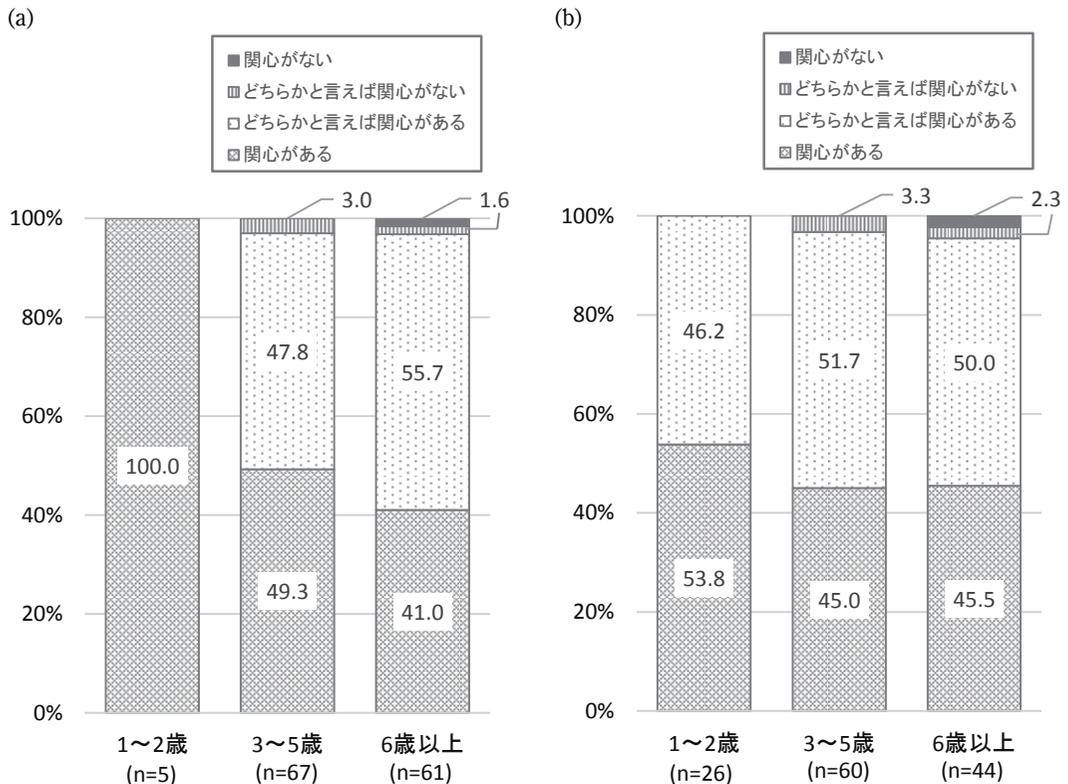


Fig. 1 Level of interest in dietary education by age of older children (a) and that of younger children (b)

13人(9.9%)、「食料を海外からの輸入に依存しすぎるのが問題だから」が8人(6.1%)、「有機農業など自然環境と調和した食料生産が重要だから」が7人(5.3%)、「消費者と生産者の間の交流や信頼が足りないと思うから」が4人(2.6%)と続いた。図表には示していないが、食育に関心がある理由として「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが重要だから」と回答した者の割合は、食育に「どちらかと言えば関心がある」場合に8人(12.3%)であるのに対し、「関心がある」場合に17人(26.6%)と有意に高値を示した( $p<0.05$ )。さらに、未就学児の有無別に解析を行ったところ、食育に関心がある理由として、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」と回答した者の割合は、未就学児がいない場合は30人(76.9%)であるのに対し、未就学児がいる場合は73人(90.1%)と高値傾向を示した( $p=0.051$ )。また、上の子の年齢別に解析を行ったところ、食育に関心がある理由として、「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが重要だから」と回答した者の割合は、上の子が6歳以上の保護者では15人(27.3%)、3~5歳の保護者では6人(10.0%)、1~2歳の保護者では1人(20.0%)であった( $p=0.057$ )。

## (2) 家庭での食育の内容

家庭で教えていることとして半数以上の者が選択した食育の内容は、割合が多い順に「食べる時のあいさつ」、「食べる時の姿勢」、「食べる前の手洗い」、「残さず食べること」、「好き嫌いをなく食べること」、「食具の使い方」であった(図2)。未就学児の有無別に解析を行ったところ、未就学児がいる場合は、「食具の使い方」を教えていることが多く( $p<0.05$ )、未就学児がいない場合は、「食器の並べ方」や「食と健康について」教えていることが多いことが示された(いずれも $p<0.05$ ) (Table 1)。図表には示していないが、子どもが2人以上の場合は1人の場合と比べて「好き嫌いをなく食べること」や「食具の使い方」について教えていることが多かった(それぞれ $p<0.05$ ,  $p<0.01$ )。回答者が女性の場合、男性の場合と比較し、「食べる時の姿勢」と回答した者の割合が有意に高値を示した( $p<0.001$ )。「郷土食・伝統食について」と回答した者の割合は、食育に「どちらかと言えば関心がある」場合に2人(2.8%)であるのに対し、「関心が

ある」場合に7人(9.9%)と高値傾向を示した( $p=0.083$ )。

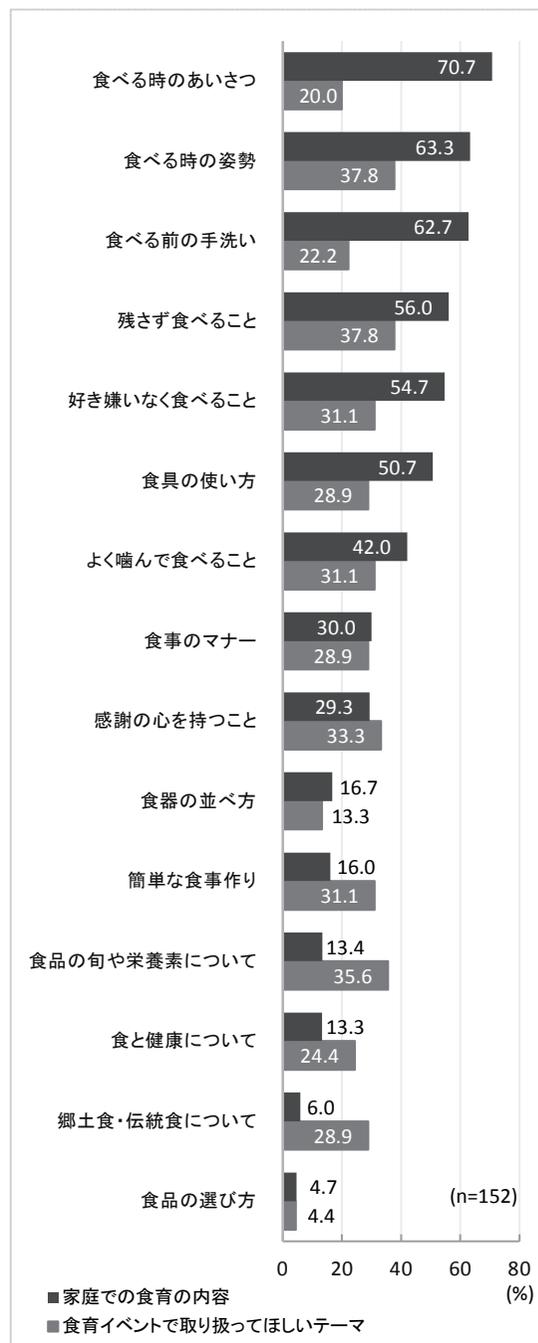


Fig. 2 Content of dietary education provided at home and requested topics for dietary education events

**Table 1** Content of dietary education at home by the presence or absence of preschoolers

	人(%) <sup>†</sup>		p値 <sup>‡</sup>
	未就学児		
	いる (n=90)	いない (n=45)	
食べる時のあいさつ	66 (73.3)	32 (71.1)	0.469
食べる時の姿勢	54 (60.0)	32 (71.1)	0.141
食べる前の手洗い	60 (66.7)	25 (55.6)	0.142
残さず食べる	52 (57.8)	22 (48.9)	0.213
好き嫌いをなく食べる	53 (58.9)	22 (48.9)	0.179
食具の使い方	50 (55.6)	17 (37.8)	0.038
よく噛んで食べる	37 (41.1)	20 (44.4)	0.426
食事のマナー	25 (27.8)	15 (33.3)	0.318
感謝の心を持つ	25 (27.8)	14 (31.1)	0.417
食器の並べ方	9 (10.0)	12 (26.7)	0.013
簡単な食事作り	15 (16.7)	7 (15.6)	0.540
食品の旬や栄養素について	9 (10.0)	7 (15.6)	0.258
食と健康について	8 (8.9)	10 (22.2)	0.033
郷土食・伝統食について	2 (2.2)	4 (8.9)	0.095
食品の選び方	2 (2.2)	4 (8.9)	0.095

<sup>†</sup> 未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。  
<sup>‡</sup> カイニ乗検定。

(3) 食育イベントで扱ってほしいテーマと魅力を感じるプログラム

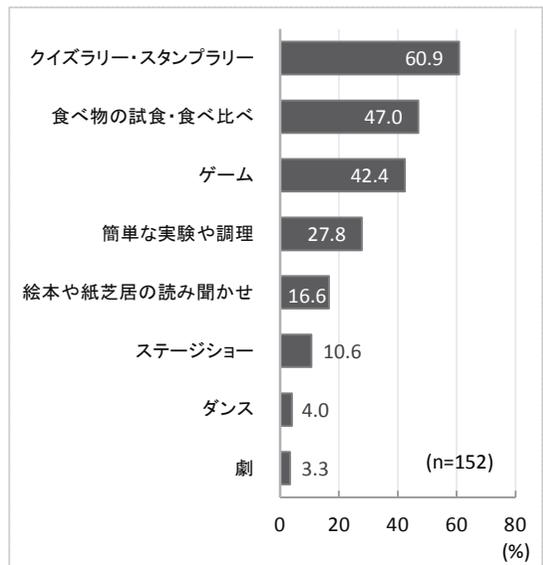
Fig. 2 に示した通り、食育イベントで扱ってほしいテーマとして、「食べる時の姿勢」と「残さずに食べる」と回答した者の割合が最も高く、「食品の旬や栄養素について」、「感謝の心を持つこと」、「好き嫌いをなく食べる」、「よく噛んで食べる」、「簡単な食事作り」、「食具の使い方」、「食事のマナー」、「郷土食・伝統食について」、「食と健康について」、「食べる前の手洗い」、「食べる時のあいさつ」、「食器の並べ方」と続いた。未就学児の有無別に解析を行ったところ、Table 2 に示した通り、未就学児がいる場合は、「好き嫌いをなく食べる」、「よく噛んで食べる」、「食品の選び方」を選択した者の割合が有意に高値を示し（それぞれ  $p < 0.05$ ,  $p < 0.05$ ,  $p < 0.01$ ）、「食べる前の手洗い」を選択した者の割合が高値傾向を示した（ $p = 0.082$ ）。図表には示していないが、回答者が男性の場合、女性の場合と比較し、「食と健康について」と回答した者の割合が有意に高値を示し（ $p < 0.05$ ）、回答者が女性の場合、男性の場合と比較し、「食べる時の姿勢」と回答した者の割合が高値傾向を示した（ $p = 0.067$ ）。また、「郷土食・伝統食について」と回答した者の割合は、食育に「どちらかと言えば関心がある」場合に 10 人（13.9%）であるのに対し、「関心がある」場合に 26 人（36.6%）と有意に高値を示した（ $p < 0.01$ ）。

食育イベントで魅力を感じるプログラムについては、Fig. 3 に示した。「クイズラリー・スタンプラリー」を選択した者の割合が最も高く、半数以上の者が選択していた。図表には示していないが、未就学児がいる場合は、未就学児がいない場合と比べて、「絵本や紙芝居の読み聞かせ」と回答した者の割合が有意に高値を示した（ $p < 0.05$ ）。

**Table 2** Requested topics for dietary education events by the presence or absence of preschoolers

	人(%) <sup>†</sup>		p値 <sup>‡</sup>
	未就学児		
	いる (n=90)	いない (n=45)	
食べる時のあいさつ	25 (27.8)	9 (20.0)	0.222
食べる時の姿勢	24 (26.7)	17 (37.8)	0.131
食べる前の手洗い	32 (35.6)	10 (22.2)	0.082
残さず食べる	38 (42.2)	17 (37.8)	0.380
好き嫌いをなく食べる	48 (53.3)	14 (31.1)	0.011
食具の使い方	34 (37.8)	13 (28.9)	0.204
よく噛んで食べる	43 (47.8)	14 (31.1)	0.047
食事のマナー	27 (30.0)	13 (28.9)	0.530
感謝の心を持つ	33 (36.7)	15 (33.3)	0.427
食器の並べ方	18 (20.0)	6 (13.3)	0.240
簡単な食事作り	26 (28.9)	14 (31.1)	0.470
食品の旬や栄養素について	27 (30.0)	16 (35.6)	0.322
食と健康について	23 (25.6)	11 (24.4)	0.533
郷土食・伝統食について	20 (22.2)	13 (28.9)	0.260
食品の選び方	19 (21.1)	2 (4.4)	0.008

<sup>†</sup> 未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。  
<sup>‡</sup> カイニ乗検定。



**Fig. 3** Programs at dietary education events that parents find interesting

(4) 「食育」で得たい知識や力

「食育」で得たい知識や力として、「食べ物に関する知識」、「栄養に関する知識」、「健康に関する知識」を半数以上の者が選択していた (Fig. 4)。図表には示していないが、回答者が女性の場合、男性の場合と比較し、「食べ物に関する知識」と回答した者の割合が有意に高値を示し ( $p<0.05$ )、回答者が男性の場合、女性の場合と比較し、「健康に関する知識」と回答した者の割合が有意に高値を示した ( $p<0.05$ )。「伝統・行事食に関する知識」と回答した者の割合は、食育に「どちらかと言えば関心がある」場合に 11 人 (15.3%) であるのに対し、「関心がある」場合に 24 人 (33.8%) と有意に高値を示した ( $p<0.01$ )。

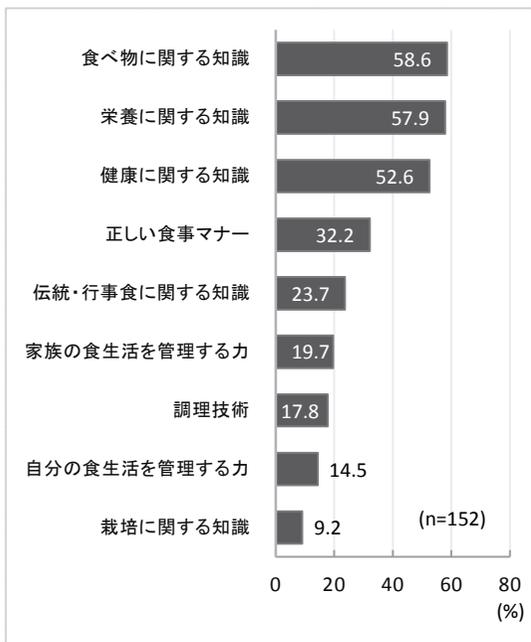


Fig. 4 Knowledge and skills that parents wish to acquire through “dietary education”

(5) 保育・教育施設へ期待する食育のテーマ

Fig. 5 に示したように、保育・教育施設へ期待する食育のテーマとして、「好き嫌いなく食べること」を選択した者の割合が最も高く、「食べる時のあいさつ」、「食べる前の手洗い」、「残さず食べること」と続いた。図表には示していないが、「好き嫌いなく食べること」を選択した者の割合は、未就学児がない場合は 9 人 (47.4%) なのに対し、未就学児

がいる場合は 32 人 (68.1%) と高値傾向を示した ( $p=0.099$ )。



Fig. 5 Topics in dietary education that should be covered by nurseries and educational institutions

4. 考察

本研究では、食育イベントに来場した子どもの保護者を対象とし、食育に対する考えや家庭での食育の実施状況の実態把握を行うことで、家庭と学校・保育所等や地域と連携した食育推進ならびに食育イベントの質向上のための基礎資料を得ることを目的として解析を行った。

まず、食育イベントへの参加のきっかけとして「通りすがり」が半数を超えており、参加の目的と

して8割以上の者が「楽しむ」ためだと回答している。食育イベントへの参加者全員が食育に関心があるとは限らず<sup>6),7)</sup>、本調査対象者においても食育に関心がない者が5%弱いたことから、無関心層を巻き込むためには、人目につきやすくアクセスしやすい会場で食育イベントを開催することや、気軽に参加できる内容にすること、楽しむことのできる魅力的なプログラムを準備することが効果的だと考えられた。

子どもの保護者の食育への関心度については、本研究結果より、下の子よりも上の子の年齢が影響していること、また、上の子の年齢が低いほど食育への関心度が高くなることが示された。乳幼児栄養調査結果<sup>11)</sup>によると、年齢が低い幼児の保護者では、子どもの食事になんらかの困りごとを抱えている割合が高くなることが示されている。子どもの食事への困りごとの有無と保護者の食育への関心度について等、子どもの保護者の食育への関心度に影響する要因については、今後詳しく検討する必要がある。一般成人を対象とした食育に関する意識調査結果によると、食育への関心度は女性において高いことが示されている<sup>12)</sup>。食育に関心がある理由としては、「食生活の乱れが問題になっているから」、「生活習慣病の増加が問題になっているから」、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」の順に多くあげられたと報告されている<sup>13)</sup>。子どもの保護者を対象とした本研究では、保護者の性別によって食育への関心度に差は認められず、食育に関心がある理由として「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」という回答が8割超えと最も多く、未就学児がいる場合に食育に関心がある理由として「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」と回答した者の割合が高値傾向であった。これらの結果より、子どもの保護者の食育への関心度には性差よりも子どもの有無が影響していることが推察され、就学前の子どもの保護者を対象に、子どもの年齢が低いうちに、子どもの発育を切り口とした情報提供を行うことが、保護者に対して、食育に関心を持たせ、関心を高める上で有用であると推察された。

家庭での食育の内容としては、「食べるときのあいさつ」、「食べる時の姿勢」、「食べる前の手洗い」、「残さず食べること」、「好き嫌いをなく食べること」、「食具の使い方」等、食事場面における関わりについて選択した者の割合が高かった。この傾向は、小

学校5年生および中学2年生の保護者を対象とした児童生徒の食生活実態調査<sup>9)</sup>においても報告されているが、本研究の調査対象では乳幼児や小学校低学年の保護者も含まれていたことから、「食べるときのあいさつ」、「食べる前の手洗い」、「食具の使い方」といった基本的な食行動に関する内容を選択した者の割合が高くなったのだと考えられた。食育イベントで扱ってほしいテーマとしては、「食べる時の姿勢」や「残さず食べること」といった家庭でも教えている内容が多くあがる一方で、「食品の旬や栄養素について」、「感謝の心を持つこと」、「簡単な食事作り」、「郷土食・伝統食について」、「食と健康について」といった、家庭で教えていることとしては選べない内容も多く選択された。食育イベントで魅力を感じるプログラムとしては「クイズラリー・スタンプラリー」や「食べ物の試食・食べ比べ」、「ゲーム」が上位に上がり、受動的に見たり聞いたりするのではなく、主体的に動いて行う体験型のプログラムの需要が高いことが示された。また、未就学児がいる場合には、「絵本や紙芝居の読み聞かせ」の需要が高かった。子どもの食事に関する困りごとは個人差が大きく、年齢によっても変化すること<sup>11)</sup>、発達過程によってふさわしい食育の内容が異なることから、幅広い年齢層に対して行う食育イベントにおいても、ある程度対象を想定した上でのプログラム考案が必要であり、対象が分かるようなブース配置にする必要があると考えられた。

「食育」で得たい知識や力としては、「食べ物に関する知識」、「栄養に関する知識」、「健康に関する知識」を選択した者の割合が高かった。保育・教育施設へ期待する食育のテーマとしては、「好き嫌いをなく食べること」、「食べる時のあいさつ」、「食べる前の手洗い」、「残さず食べること」といった、家庭でも教えている内容で、効果が目に見て分かりやすいものを選択した者の割合が高かった。得られた結果より、「食育」で得たい知識や力と、家庭で行っている食育の内容や保育・教育施設へ期待する食育のテーマがやや異なっていることが伺えた。小学6年生の保護者を対象とした調査<sup>14)</sup>によると、子どもと朝食や夕食をいつも一緒に食べるようにしている保護者の割合や、食事のマナーや作法についていつも教えている保護者の割合、ふだんの食事によく噛んで味わって食べることをいつも教えている保護者の割合は、学校が保護者に対してひと月に1回程

度の頻度で情報提供を行う場合に高いことが報告されている。一方で、同調査において、栄養バランスのよい食事、地産地消、郷土料理や伝統料理、食品の安全性に関する知識等については、学校が保護者に対して情報提供を行う頻度を高くしても、保護者による子どもへの働きかけの状況の改善に結びついていないことが示されている。すぐに実践できる内容については、情報提供を行うことによる効果が得られていることから、学校・保育所等が働きかけを行い、家庭と連携してすすめていくことが重要であると考えられた。食育は保健分野、教育分野、食農分野などの多分野が関わり推進していくものであることから、家庭で実践しづらい内容の食育については、学校・保育所等や地域で扱うことができるよう、保育内容や教育内容に組み込む、食育イベントのテーマとして扱うといった対応が必要であると考えられた。

食育に「関心がある」者は、「どちらかと言えば関心がある」者と比較し、食育に関心がある理由として「食にまつわる地域の文化や伝統を守ることが重要だから」と回答した者の割合が有意に高値を示しており、「食育」で得たい知識や力として、「伝統・行事食に関する知識」と回答した者の割合も有意に高値を示した。また、家庭での食育の内容として、「郷土食・伝統食について」と回答した者の割合は高値傾向を示しており、食育イベントで扱ってほしいテーマとして、「郷土食・伝統食について」と回答した者の割合は有意に高値を示した。食育への関心度を高めることで、より広い視点で「食」を捉えることができるようになることを示唆している結果とも考えられた。

本研究には、以下に述べる限界がある。まず、調査対象が食育イベントにおいて著者らの出展ブースへ立ち寄った子どもの保護者に限定されているということがあげられる。また、横断研究であったため、一人の子どもが成長する過程での保護者の食育に対する考えの変化について、検討することができなかったことも課題である。今後は調査対象を拡大し、縦断研究も視野に入れ、より詳細な検討を行う必要があると考える。

以上のような限界は有するものの、本研究では、食育イベントに会場した子どもに対する家庭での食育の実態やその保護者の食育イベントに対するニーズが示され、家庭と学校・保育所等や地域と連携し

た食育推進の必要性や課題が明らかになった。得られた結果は、家庭と学校・保育所等や地域と連携した食育推進ならびに、食育イベントの質向上のための基礎資料となることが期待される。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました、対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 農林水産省：第4次食育推進基本計画, <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-24.pdf> [2021.10.12]
- 2) 総務省行政評価局：「食育の推進に関するアンケート調査」結果報告書（国民編）, [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000385761.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000385761.pdf) [2021.10.12]
- 3) 白木裕子：日本小児看護学会誌, 21巻, 1-7 (2012)
- 4) 磯部由香他：日本食育学会誌, 8巻, 165-171 (2014)
- 5) 足立恵子他：日本食育学会誌, 6巻, 197-205 (2012)
- 6) 農林水産省：第14回食育推進全国大会 大会アンケート集計結果, <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taikai/attach/pdf/14th-15.pdf> [2021.10.12]
- 7) 農林水産省：第13回食育推進全国大会 大会アンケート集計結果, <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taikai/attach/pdf/13th-5.pdf> [2021.10.12]
- 8) 農林水産省：食育に関する意識調査 調査票（平成29年3月）, <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki//attach/pdf/H29PDF-18.pdf> [2021.10.12]
- 9) 平成22年度 児童生徒の食生活実態調査【食生活実態調査編】, [https://www.jpnsport.go.jp/anzen/school\\_lunch/tabid/1490/Default.aspx](https://www.jpnsport.go.jp/anzen/school_lunch/tabid/1490/Default.aspx) [2021.10.12]
- 10) 金子直子他：栄養学雑誌, 74巻, 69-79 (2016)
- 11) 厚生労働省：平成27年度 乳幼児栄養調査結果の概要, <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000134208.html> [2021.10.12]
- 12) 農林水産省：食育に関する意識調査報告書（令和3年3月）, [https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/r03/pdf/houkoku\\_2\\_1.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/r03/pdf/houkoku_2_1.pdf) [2021.10.12]

- 13) 農林水産省：食育に関する意識調査報告書（令和2年3月），[https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/r02/pdf/houkoku\\_2\\_1.pdf](https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/r02/pdf/houkoku_2_1.pdf) [2021.10.12]
- 14) 総務省行政評価局：「食育の推進に関するアンケート調査」結果報告書（学校，児童及び保護者編），[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000381378.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000381378.pdf) [2021.10.12]